

清河八郎 「西遊草の道」

「元氣・まちネット」踏査後半同行記

3

1855(安政2)年に母を連れて全国を旅した清河八郎は、米沢城下から米沢街道を北上し、上山で羽州街道に入った。「まもなく上山にいたる。ここで山中七ヶ宿往來と合すると八郎の旅日記「西遊草」(東洋文庫)にある。

八郎親子の旅の奥内ルートを検証する東京のNPO法人「元氣・まちネット」の踏査隊は、上山市三本松で旧羽州街道と米沢街道の追分碑を確認した。両街道がTの字型に交わり、地名の通り近くに松がある。

碑の説明板によると、1691(元禄4)年に供養碑が建てられ、後に追分の道標が刻まれた。風化して読みづらいが「右八上年さわ 左八江とみち」と彫ってあるという。「江とみち」は江戸道で羽州街道を指す。高さ1・7メートルに使った石は相撲取りが背負って来たと伝えられている。羽州街道は奥州街道の脇街道で、七ヶ宿(宮城県)を経て金山峠から本県に入り、上山、山形、新庄、金山を経て秋田県に抜ける。庄内、新庄

街道筋に残る碑確認

米沢—上山—山形



石積み水路が再整備され新名所となっている「水の町屋 七日町御殿塚」を訪ねる踏査メンバー＝山形市



山形、上山、秋田、弘前などの各藩が参勤交代に利用した。八郎親子の一行は、上山霧開気を再現したスペースがある。そこから眼下に山形市に到着。「坂の上に二軒の茶屋があり、山形城や月山を見渡せ、特に葉山が目立っている」と八郎は書いた。「まちネット」の踏査メンバーがその場所を訪ねたのは夕暮れ時。山形ニュータウン「威王」が維持に苦勞していること、マツタケが千歳山の名産であることなどが記されている。博徒の親分同士の争いにも触れており、現代語版(東洋文庫)を編訳した小山松勝一郎さんは「庶民の歴史を探る一助となるであろう」と解説している。

八郎親子は山形で「旅籠町の柴田屋」に泊まった。宿があった所には現在、テナントビルが立っている。踏査隊は、そのビルやJR山形駅前の飲食店「伝七」を運営する柴田進さん(64)を訪ねた。柴田さんは旅館にあった「旅館柴田屋傳七」「庄内御荷物宿「山形縣廳指定旅館」の古い看板を見せてくれた。「柴田屋は1997年に廃業したが、350年の歴史があると聞いていた。武士だけでなく出羽三山参りの行者なども泊まったようだ」と話す。明治以降も多くの著名人が宿泊した。日本の資本主義の基礎を築いたとされる渋沢栄一の書が残っているほか、戦時中にはコメディアンの古川ロッパが泊まり、わらじをあげたらすすまに絵を描いてくれたというエピソードも。戦後はプロレスラーの定宿にもなり、ジャイアント馬場さんやアントニオ猪木さんも利用したという。

「まちネット」の踏査メンバーは、かつて街道筋のにぎわいの中心だった市内十日町で、明治初期に取り払われた碑を借して1955(昭和30)年に建てられた「十日市跡」の石碑を確認。霞城公園の二の丸東大手門や石積み水路が再整備された「水の町屋七日町御殿塚(せき)」に足を運び、天童方面へと向かった。(文)鶴岡支社・伊藤智哉、写真)同・色原高幸

山形新聞
2012年11月26日
に掲載!